



中井久夫「精神科治療学」掲載著作集—臨床医の眼差し—

中井久夫 著  
星和書店  
2022年11月 380頁  
本体価格 3,600円+税

中井先生が逝去されたのは2022年8月8日のことである。すでに数多くの著作が世に出ているが、その内容は精神医学にとどまらず一般向けの随想まで多岐に渡っている。本書はタイトル通りのもので、『精神科治療学』誌に掲載された先生の論文を集めたものである。中井先生と同誌は深いつながりがある。1986年に創刊した『精神科治療学』は、誌名にあえて治療学と銘打っているのだが、先生は創刊時の編集主幹であった。その当時は「治療学」という聞き慣れない用語が新鮮で耳目をひいたことを覚えている。誌名も先生のご意見が反映されたものではなかろうか。

本書はサブタイトルに「臨床医の眼差し」とあるが、「先生ならでは」の視点があちこちに散りばめられている。いくつかの論文を取り上げてみたい。冒頭にある「抗精神病薬の使用戦略試論」(p.1-18)は今日の治療ガイドラインとはかけ離れたものだが、自分自身の臨床経験と照らし合わせてみると「確かにそうだな」とか「そういうことか」と納得させる説得力がある。患者との関係性を重視する先生が特に深い関心を寄せていたのがサリヴァンである。サリヴァンの代表的な著作の翻訳にもかかわられているが、本書にもシリーズ「サリヴァンを読む」(全8回, p.31-84)が収録されている。統合失調症の精神病理については、当時の関心が病勢期の精神症状や発病状況論に向くところ、病勢期を過ぎ寛解に至るまでの回復過程をつぶさに観察した業績がよく知られている。病理を理解することはもちろん大切なのだが、病からの回復過程に自己治癒力があること(今日でいうところのレジリエンス)、それを邪魔することなくどうやって促していくことができるのかという重

要な視点を提示してくれた。病と向き合う人格や治癒への機転を患者のなかに見出そうとする姿勢に多くの精神科医は心打たれたはずである。本書では「急性期離脱の一経路」(p.93-105)が、これから回復期に入らんとする患者の様子を捉えている。とても真似ることができない先生の才能の1つに図表のユニークさがある。経過図(p.102)を見てほしい。まちがいに編集者泣かせの微に細にわたる臨床経過が1ページの図で示されている(この図を印刷物として構成しなおした編集者にも頭がさがる)。1つの症例を大きな枠組みでまとめようとするのではなく、細かく見ていくことで浮かび上がるものを抽出しようとするのが先生のスタイルだろう。「精神病棟の設計に参与する」(p.253-265)には圧巻のスケッチがある。かつて先生が大会長を務められた学会の折に配布された近隣の飲食店の手作りマップを見て驚いた記憶がある。文章だけでなく描画においても先生の才能は比類ない。書評子は、精神科医になりたてのときに風景構成法を実践している中堅ドクターから先生の著作に触れる機会を得たのだが、本書にも「風景構成法」(p.179-190)が取り上げられている。

多数例を集め仮説を検証するというより「個々の症例から学ぶ」という姿勢を徹底させているのが先生のスタイルではないかと思う。その観察はKraepelin, E.のような冷徹な客観性とは違う。患者がどう感じているか、そして治療者との関係性についても関心を向けている。臨床的な見方・評価は自然科学的な法則のようにたった1つの「正しい」ものがあるのではなく本質的に多様である。それだけに医学的モデル(因果的関連への傾倒)と実証主義をモットーとする現代精神医学の有り様は、中井先生にはどのように映っていたのだろうか。脳への関心が強まれば強まるほど、患者に対する心的な理解はより浅薄になっている。現代精神医学に携わるわれわれが表面に表れているものだけしか見ようとしていないこと、客観性にとられるあまりに視野狭窄に陥っていることに改めて気付かされる。本書は、そのような反省をわれわれに促す好著であると言えるだろう。

(古茶大樹)